國學院大學学術情報リポジトリ

・第１回「国学と復古：光格天皇以後」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000541

平成30年度第１回国学研究プラットフォーム公開レクチャー「国学と復古―光格天皇以後―」要旨

本居宣長に「水草のうへの物語」という和文寓話がある。

「あめつちの池」のほとりで「かみよのみふみ」なる翁が、この池の歴史を語っている。池の水草にすがりついている蛍「大やまとのまさ彦」が翁の話に耳を傾けていると、別の蛍「からごゝろの狭麻呂」がやってきてこう言い出した。「あの翁の話は嘘ばかり、この池が凍ったところなんて誰も見たことないじゃないか」。まさ彦は「そんなことを言わず、長生きな翁の話を聞くべきだ」と反論すると、狭麻呂はそれなら物知りの「漢経史あざなは聖賢」なる蛙の意見を仰ごうという。二匹の蛍に対し蛙は仰々しく語りだした。「私は何でも知っている。この池の水草はこの春、私が幼い頃に生えてきた。それ以前に水草なんてものはなかったのだ」。翁は彼らのやりとりを聞いて詠じた。「おひそめし根ざしもしらでまなび草末葉のうへを何かあらそふ」。

寓意は明白で、「大やまとのまさ彦」こと宣長のみが翁のことば（＝神典）を通じて世界の真理に迫ろうとしている。もう一匹の蛍と蛙はみずからの常識（＝漢心）に捕われているために永遠に真理に触れ得ないのだ、と。

作中でまさ彦は「若葉」の水草に「ただひとつすがりたる」と描写され、対して狭麻呂は「西のかた」にある「くきも葉もこよなくうるはしくさかえて」いる水草に「いとあまたいたる」蛍のうちの一匹とされている。つまり宣長はまさ彦、つまり自身を孤独な新興勢力とし、対する狭麻呂の側を「西」、すなわち京における多数派の旧守勢力と位置づけている。宣長におけるこの新旧の学派対立構図は近世後期の日本学の見取り図を描く上で極めて示唆的なものといえる。

近世国学史上において新旧両派の対立構図が多くの人々にとって明確な形をなした時期は、地下古学派の著述出版が盛時を迎えた18世紀末頃のことである。無論それ以前から、契沖や荷田春満、賀茂真淵など一門を構えて旧説打破をうたった人物は存在していたが、じつのところ彼らが生前に刊行した著述は僅か数点で、社会的波及力の点では未だしい。

他方、安永９年に即位した光格天皇を戴く当時の朝廷もまた、権威上昇をはかるべく朝儀・祭祀の再興を精力的に推し進めており、とりわけ天明の大火以降、王朝様式に基づく内裏の復元的造営が行われるなど復古的機運が瀰漫してゆく中、その根拠となる諸資料・知識に対する需要は高まっていった。

「水草のうへの物語」で宣長が多数派の旧守勢力として批判していたのは、まさにこうした復古的機運の中で近世朝廷社会内での役割を果たすべく精力的な活動を行っていた和学者たちのことだ。またこの時期の地下官人の中には賀茂季鷹、橋本経亮、藤島宗順など、伝統的な和学のみならず新興の古学へもいち早く関心を持った人物が一定数いたことも看過できない。18世紀末以降加速度を増してゆく朝廷の復古志向は、古学派のみならず和学全体の活性化を下支えする原動力として機能していたものと目される。

しかし実際にはこうした世の復古的潮流に対する温度差はさまざまであった。京都の歌人で妙法院宮真仁法親王の和歌の師でもあった小沢蘆庵は再建成った寛政度内裏への遷幸

を「よそひ（表面）」ばかりの復古と突き放しているし（「遷幸記」）、荷田春満の姪孫にあたる荷田信郷もまた「超過シテハ大ナル害ヲ招クベシ」と行き過ぎた復古が孕む危険性へ警鐘を鳴らしている（寛政４年成『崇国一家言』）。

いにしえを規範とすることが眼前の現実の否定へ繋がってしまう点に復古の危うさがある。同趣の発言を残している人物は上田秋成や橋本経亮、田宮橘庵など枚挙に暇がなく、いずれもいにしえを尊ぶ学者たちが過度の復古志向のあまり、当代の諸秩序を相対化してしまうことの危うさを述べている。

宣長の漢心批判がそうであるように、文献実証を通じた既存の権威への異議申し立ては、ときに社会との軋轢を産み出す。たとえば小津久足はかつて後鈴屋門であった頃の心理状態を回顧し、「つねに心は不平にて、身にあづからざる世のさまを、うらみかこちなどして」いたと述べるが、これは近世後期の古学者の心理状態の証言として貴重である（天保11年成『陸奥日記』）。

となれば、近世期の知識人の多くにとっては、むしろ既存の秩序や慣習との折り合いをつけながら穏当な形で復古を目指すという、現状追認的で微温的な態度の方がはるかに支配的であったはずだ。宣長が「水草のうへの物語」において多数派の旧守勢力として位置づけた人々とは、つまるところそうした存在なのであった。

また、復すべきいにしえの基準点も、一部の古学派が唱えるように大陸文明からの影響を排除した純然たる日本にのみ置かれていたわけではなかった。朝廷が志向していたのは平安王朝期への復古であって、大陸文明への崇敬はそのまま保持されていた。他方、武士の側に立ってみれば、武家政権の規矩たる鎌倉・室町期の一切を飛び越えた古代への遡行が許容されるはずもなく、たとえば文政10年に成った沢田名垂『会津学風申出書』は、藩校での和学教育のあるべきすがたを述べる際、「東鑑以下、武家の世々の記録等」への関心が稀薄な古学者たちの学問は「全備の和学」とは言いがたく、「只管、古代めきたるをのみよろしきことゝと心得、古にも今にも叶ひ申さざる事を作為」する「今日只今の用」をなさないものと断じている。このように近世期における和学・国学には到底一枚岩とは言いがたい複雑な文脈が存在していたのである。

さて、「国学」の語が日本を対象とした学問の意味で広く使われ出すのは18世紀後半頃からのことで、近世期を通じて「和学」の呼称の方がより一般的であったことは良く知られている。にも関わらず「国学」の一語のみが現在広く使われているのはなぜなのか。

ひとつには明治20、30年代における「国」を冠した語の急速な地位上昇があると考えられる。日本の近代国民国家の黎明期にあたるこの時期、「国語」「国文学」「国史」「国書」など「国」を冠した術語が官学アカデミズムを中心に採用されている。明治23年の国学院設置も同時期のものである。

この時期、「国」が浮上する一方、「和」が忌避されるという現象が起きている。明治３年の歌会始では懐紙の端作の書式に変更が加えられ、従来の「和歌」という表記は悉く「歌」へと改められた。これは元を辿れば賀茂真淵の学説に依拠したものであり、宮廷和歌の懐紙書法はここに至り、新興の真淵学に基づいて、これまでの和歌故実の伝統を無視する形へと変更させられたわけである。18世紀末頃から先鋭化してきた新旧の学派の対立は、このような帰結を迎えることとなった。

かくして、「和学」よりも歴史が浅く、必ずしも一般的ではなかった「国学」の語は、19世紀末に急浮上し、20世紀に至ってその地位をますます盤石なものとしていったのである。

（一戸渉）